

一般演題

演題1. 糖尿病教育入院患者56名の口腔内状況と問題点

○栃内 圭子, 阿部 晶子, 相澤 文恵,
杉浦 剛, 岸 光男, 稲葉 大輔,
米満 正美

岩手医科大学歯学部予防歯科学講座

目的：糖尿病患者について口腔内状況と歯科保健行動を調査し、それらの実態を明らかにすることを目的とした。

方法：平成18年3月から平成20年1月まで、岩手医科大学附属病院で糖尿病教育入院に参加した143名中、口腔診査を希望した56名について、口腔自覚症状、歯科保健習慣についての質問紙調査後、口腔診査を実施した(受診率39.2%)。分析は40歳以上の53名(平均年齢59.9±10.6歳)について行った。分析対象者を40~59歳(28名)と、60歳以上(25名)の2つの年齢階級に分け、現在歯数、歯周ポケットを有する者の割合、歯科保健習慣の有無、を全国データ(平成17年歯科疾患実態調査または健康日本21中間評価指標値)における同等の年齢階級と比較した。また、対象者における歯周ポケット所有状況と自覚症状の有無および糖尿病病歴期間との関連を分析した。

結果：対象者群と全国値の比較において、平均現在歯数に差は認められなかった(40~59歳;対象者24.8, 全国25.3;60歳以上;対象者18.9, 全国16.8)にもかかわらず、歯周ポケットを有する者の割合は、両年齢階級で対象者の方が有意に高かった(40~59歳;対象者60.7%, 全国:41.5%;60歳以上;対象者84.0%, 全国:46.7%)($P < 0.05$, カイ二乗検定)。良好な歯科保健習慣をもつ者の割合は全国値より低い傾向にあり、特に清掃補助器具の使用について顕著だった。また、分析対象者中で何らかの自覚症状を持つ者と歯周ポケットを有する者は一致していた(ϕ 係数 = 1.00)。

考察：対象とした糖尿病患者群で歯周ポケットを有する者が多く、必ず自覚症状を伴っているにもかかわらず良好な歯科保健習慣を持つ者は少ないことから、糖尿病患者に対し歯科健診を実施し、口腔への自覚を促すことが歯科保健行動の強化につながる可能性が示唆された。

演題2. 造血幹細胞移植患者に対する口腔ケアへの取り組み

○阿部 晶子, 有原 和子*, 國安 那月*,
高橋美枝子**, 関根真理子*, 水城 春美***,
米満 正美

岩手医科大学予防歯科学講座, 岩手医科大学附属病院薬剤部**

岩手医科大学附属病院歯科医療センター歯科衛生部**, センター長***

目的：造血幹細胞移植時には、前処置に放射線照射や化学療法を行うために、様々な副作用が発現する。その中でも口腔内における副作用は高い頻度で発現する。岩手医科大学附属病院血液内科では、平成16年から歯科医師、歯科衛生士が、移植チームの一員として移植患者に対する早期からの口腔ケアを行っている。今回は、Oral Assessment Guide を評価基準とし、口腔ケアを行った経過を、症例を通して報告する。

対象・方法：平成18年1月から平成19年9月に岩手医科大学血液内科において造血幹細胞移植を受けた者19名(男性10名, 女性9名, 平均年齢32.7±11.4歳)を対象とした。この19名に対し、移植前からOral Assessment Guide を用い、口腔内状況を評価し、移植のための口腔内環境を整え、セルフケアの指導を行った。前処置開始後は、ベットサイドで口腔内評価を行い、症状発現時には、我々が作成した口腔ケアガイドラインに従い口腔ケアを行った。

結果：Oral Assessment Guide のすべての評価項目でスコアの最大が2の者は16名(84.2%)で、スコア3が認められた者は3名(15.8%)であった。移植期間を通じて、スコア1、つまり症状が発現しなかった者は認められなかった。また、スコア3と評価した頬粘膜、口唇部位も、口腔ケアガイドラインに従い口腔ケアを行ったところ、広範囲に移行することなく限局した状態で治癒に至った。また、19名の口腔内症状の平均発症期間は、19.4±9.8日であった。

まとめ：造血幹細胞移植患者に対し、Oral Assessment Guide を用い口腔内の評価を行い、口腔ケアガイドラインを作成し、それに従い口腔ケアを行った。その結果、Oral Assessment Guide を用いたことにより、口腔内の状態を客観的に評価することができた。また、口腔ケアガイドラインに従って口腔ケアを行ったことで、処置の標準化を計ることができた。

今後は、評価法も含め、洗口剤、塗布剤の口腔ケア